法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

一九四〇年代前半の風巻景次郎 : その文学史論をめぐって

KINUGASA, Masaaki / 衣笠, 正晃

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
(1)
(終了ページ / End Page)
(18)
(発行年 / Year)
2007-01-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002774

Hosei University Repository

一九四〇年代前半の風巻景次郎

――その文学史論をめぐって――

衣笠正晃

はじめに

国文学研究史のなかで文学史家としての風巻景次郎（一九〇二―六〇）の独自性は、主体的な文学の享受を通して文学史を構想したこと、客観的に存在する事物としての文学作品を対象とする既存の文学史記述に対して「焦点を主体の側に移そうとした点で、まさに一つのコペルニクス的転換」[1]（西郷信綱）をなしとげたことにあるとされる。風巻がそうした方法論的転回を明確に表明したのは、一九四〇年代に入ってほどなくのことであった。四〇年秋以降ほぼ隔年で出版された風巻の三冊の著書――『文学の発生』（子文書房、一九四〇年十月）、『神々と人間』（八雲書林、一九四一年十二月）、『日本文学史の構想』（昭森社、一九四二年十一月）（以下それぞれを『発生』『神々』『構想』と略記する）――は、こうした「主体的立場」からの文学史方法論の提示とその実践の試みとして、一つのまとまりをなすものと考えられる。[2] 本稿ではこれらの著書を中心に、同時期の論文、座談会での発言などを併せて検討し、戦時下の風巻が思い描いた「日本文学史」のあり方をたどることにする。

Hosei University Repository

一　「個人／主観」から「主体的立場」へ

最初に上記三冊の構成を概観しておきたい。[3]『発生』では「主体的立場」のマニフェストである書き下ろし論文「文学の発生」を巻頭に、風土や「日本的なるもの」などの具体的トピックを扱う文章、一九三〇年以降書かれた文学（史）理論にかかわる論文と、計十五本の論文を収める。[4]『神々』は『発生』刊行後に書かれた上代から近世にいたる特定の時期に関する文学史論六篇に、書き下ろし論文「文学史」を加えて構成されている。風巻の敗戦前最後の単著である『構想』は、時代区分をめぐる新旧の論文三本（第一部）、『万葉集』から正徹にいたる時代・作品についての論文九本（第二部）、日米開戦後の「日本の哲学」を模索する文章五本（第三部）の三部からなる。とくに第一部冒頭の論文「神代と現代との間」（書き下ろし）は、『発生』に収めた三〇年代の論文に明らかな理論的彷徨を自己分析した文章である。以上のなかで方法論自体を意識的に論じたのは、「文学の発生」（『発生』）、「神代と人間との間」（『構想』）の二論文だと総括できるだろう。

論文「文学の発生」の題名には意図的に二重の意味が込められている。その一つは、あとで触れるとおり、歴史の上での「文学の発生」である。しかしそれに先立ち、前提となるのがもう一つの意味、個人における「文学」の「発生」である。すなわち、「文学」とは「読者＝享受する者の心」において「発生」する――作品自体は事物にすぎず、読者がそれを文学だと感じることによって文学となる、ということである。

ここで注意すべきは、風巻が「神代と現代との間」では「文学とは自分を通して把握されたものに外ならぬとする立場の復活（傍点引用者）」という言い方をしていることである。[5]実は文学が個人を通じてしか捉えられないということ自体は、風巻によってすでに三〇年代前半において確信されていたのであり、[6]当時の風巻にとっての問題は、そうした個人に基準を置く文学（性）の把握と学問としての文学研究が両立しえないという認識にあった。そこで風巻は、個人的な文学把握という「大正時代の近代的文芸思潮から蒙つた影響を、完全に研究の分野から駆逐」[7]

Hosei University Repository

したうえで、客観的で公正な「歴史的立場」にもとづいた文学史記述を実現しようとした。三〇年代におけるマルクス主義やデュルケームらの社会学、民俗学への接近は、そのための方法を求めてのことであった。

したがって「文学の発生」における新機軸とは、「個人的な文学成立のはたらきを唯一の武器として、文学史を書くといふこと（傍点引用者）」[8]にあった。風巻は「個人的な文学成立のはたらき」を、これまでのように文学史記述の障碍と考えるのではなく、むしろ必要不可欠の前提たらしめようとする。それによって、これまで無理に切り離していた「文学」と「文学研究」を統合し、彼自身の言い方に従えば、自らのうちで対立していた「詩人」と「歴史家」を一つにしようとするのである。[9]

しかし個人の主観的な感覚にもとづく歴史というとき、そこには恣意的な思い込みだけが残るのではないかという危惧が当然生じる。風巻が三〇年代におもに用いてきた「個人的」あるいは「主観的」に替えて「文学の発生」以降「主体的」という言い方をするようになった背景には、個人を超えた共同性に客観性の根拠を求めようとする意図があったと考えられる。「神代と現代との間」で「主観的」と「主体的」の区別に触れた箇所を見ると、風巻は対象を美と感じるのは主観の働きだとしながら、時代や生活、教養を同じくする者のあいだに存在する共通した「感じ方」について、次のように述べている。

> 単に個人的に主観的とばかりは言へず、何らかの客観性が存するのであつて、その点では個々の人が感じてゐるといふ事をただちに主観的だと言ひ換へるのは厳密な仕方であるとは言へない。強ひて言ふなら主体的とでも言つておくべきでもあらう。とにかく個々人勝手な感じ方をしてゐながら、それでゐて超個人的な類同性を示す点がある〔……〕。[10]

「文学の発生」で風巻は「文学の発生するのは個人の心に於てであり、文学の系譜が生きるのは個人の心に於てであるが、それが対象化されて見られる時は、それ等の在り場所は社会の公衆である」[11]と言っているが、この「公

Hosei University Repository

衆」は上述の共同性を実体化したものであり、それゆえに風巻の論のなかで重要な役割を与えられていると言ってよいだろう。[12]

二　立論の背景――時枝誠記、ヴァレリー――

周知の通り「主体」ないし「主体性」という語は、とりわけ世界史における日本ないし日本民族の役割という文脈のなかで、戦時下における一種の流行語となっていた。[13] 国文学者のなかでも、たとえば志田延義は、「主体」という語を頻用して総力戦体制下での国文学研究者の覚醒と奮起とを説いているが、[14] ここで注意しておきたいのは、この時期の風巻は「主体的立場」（あるいは修飾語としての「主体的」）と言い、「主体」ないし「主体性」という言い方をしていないということである。[15]

当時風巻の周辺で「主体的立場」というタームに重要な意味を持たせた例としては、時枝誠記の論文「言語に対する二の立場――主体的立場と観察者的立場――」がある。この論文で時枝は「言語に対する立場」を「理解、鑑賞、価値批判」を行なう「主体的立場」と「研究」にあたっての「観察者的立場」の二つに大別している。そして「文学研究といふ観察者的立場は、創作主体の活動といふ主体的活動を考慮することによつて始めて研究の完璧を期することが出来る」、換言すれば「観察者的立場は、常に主体的立場をその中に包含することによつて始めて可能とされる」として、「主体的立場」を「観察者的立場」の前提として位置づけるのである。[16] このように「主体的立場」が研究の前提として設定される点では、時枝と風巻の所論は近いところにあると言える。上記の時枝の論文は国文学・国語教育雑誌『コトバ』の一九四〇年七月号に掲載されたが、「文学の発生」の執筆が同年八月であることから推して、[17] 風巻がこの論文を参照していた可能性は充分に考えられる。

ただし時枝においては、「主体的活動」をおこなうのは創作主体としての「作者」だったのに対して、風巻の場合「主体的立場」にあるのは作品を感じる側、つまり「読者」の側だという違いがある。この問題を考えるために、

Hosei University Repository

こんどは風巻自身が「文学の発生」を執筆する直接の刺激となったと告白している書物――ポール・ヴァレリーの『詩学叙説』について見ておきたい。[18] ヴァレリーは文学史を「作者や作品の経歴上の出来事としての歴史としてではなく、《文学》を生産もしくは消費するものとしての精神の歴史」[19]として定義し、「作られたもの」としての作品より「作る働き」を重視するとしている。[20] そして作品は作者＝生産者にとっては終結、読者＝消費者にとっては発展の起源であるとして、作者と読者のそれぞれが作品について抱く観念が相容れないことを当然視するのである。このようなヴァレリーの考察は、風巻による次のような定義に確かに反映していると思われる。

文学とは作品を中にして、作家にとつては作品形成への表現のはたらきであり、読者にとつては、作品の享受によつて己の中に文学を成立せしめるはたらきに外ならない故、文学史とは、さうしたはたらきの歴史である。[21]

ただしここでも、風巻の場合アクセントが移動していることが指摘できる。作者と読者が作品を間にはさんで各々独立した存在であり、各々の作品解釈の間に必然的にズレが生じうるという構図において、ヴァレリーの力点は作者の側の創造の働きに置かれていたが、風巻はむしろそこに受け取る側の読者の自主性を読み取っている。おそらく風巻はそこに読者の立場からの主体的な文学史の組み立てを正当化する根拠を見出していたであろうと考えられる。

三　「文芸」と「文学」との区別

この作者と読者の立場の違いが反映しているのが、風巻による「文芸」と「文学」の区別である。『発生』の「序」で風巻は、前著『中世の文学伝統』（一九四〇年二月刊）以来、自分は「文学」という語を「文芸」よりも狭い意味で用いていると述べている。たしかに『中世の文学伝統』では「文学とは、せまい意味の文学的な今日いふ

Hosei University Repository

ところの文学のことなのであつて、それの本質は、個人の心情を通した抒情である。随つてそれはまた、読者の個人的心情を抒情的にする」[22]と言い、今日的で個人の抒情とつながるものを限定的に「文学」と呼ぶ見方を示していた。『発生』の「序」では続けてさらに「文芸」の語を「文学」と対比し次のように説明する。

文芸といへば、ひろく言葉に関する民芸をも含んでゐる。勿論時の古今を問はない。しかし文学といふ時は、近代日本の個人的創作文芸、及びそれに系譜のつながる伝統的文芸だけを取り立てて言ふのである。[23]

つまり広い意味を持つ「文芸」と、近代人の感性が捉えうる、より狭いものとしての「文学」とが識別されている。さらに「神代と現代との間」では、担い手の側にポイントをおいた整理がされる。すなわち「民間伝承的地盤においてしか伝えられぬ」「神々の文学」ないしその末裔である「集団的人間の作品」＝「文芸」と、「すべての人間の教養に結」ぶ「個人的人間の作品」＝「文学」とが区別されるのである。[24]

こうした「文芸」概念の括り出しについては、民俗学、とくに柳田國男の影響が考えられる。つぎに引く『日本評論』一九四〇年七月号の座談会（「民俗座談　柳田國男氏を囲みて」）では風巻に答えて柳田が「文芸」について述べている。

風巻　先生は文学といへば昔話のやうなものを含めて御話しになりますね。

柳田　私には文芸といふ方です。これをもつと精確に言ふ時には民間文芸いふ（ママ）言葉を使ひます。吾々のは口で伝へる口承文芸ですね。この頃はわざと文芸々々と言つて居るのですが、おかしいぢやないか文芸と言ふのは、かう言はれたら、文芸には字で書くのと二通りあるのだといふことを言はうと思つて、実は待構へて居るのです。（笑声）[25]

Hosei University Repository

つぎに挙げる『俳句研究』一九四〇年十二月号の座談会「俳諧と日本文学」（風巻、柳田のほか折口信夫、谷川徹三が出席）では、柳田の質問に答えて風巻が、自らの考える「文学」と「文芸」の区別について、文学史のなかでの位置づけも含めて述べている。

柳田　あなた方は、「文学」といふ言葉と「文芸」といふものゝ差を認めませんか。

風巻　僕は認めますが……。

柳田　いまわれわれの言ふ文芸といふものはあつたでせうね。

風巻　初めに文芸があつて、その中に歌に依つて文学を創らうといふのが一寸出て来たんだが、それが消えてしまふんぢやありませんか。文芸としては民間に伝つて行つて、宮廷の方で漢詩ばかりが文学を背負つて立つてゐたんぢやないかといふ気がします。古今以後新しい文学としての運動が生れるんではないか、といふ一応の解釈をして、あの歴史の現象を合理化してゐるんですが、如何でせう。[26]

折口　其は、さうでせうね。

すでに見たとおり「文学の発生」というタイトルには、歴史上の「文学の発生」という意味が込められていた。つまり如上の「文学」が登場する文学史上の時点を見定めることが、風巻にとってつぎなる問題であり、文学史を構想・叙述するにあたってより実際的な問題でもあったわけだが、それに対する答えとして上記の座談会では『古今集』の名を挙げている。他の場所では『伊勢物語』や六歌仙の和歌という言い方などもされているが、[27] まとめれば風巻は九世紀後半にそうした時点を見ていた。そして、そこから『源氏物語』『新古今集』へとつながるラインが、現代人が文学を感じ取れる抒情の系譜だとするのである。[28] したがってその時点より前に位置する『万葉集』は、そこにいったんは今日的な文学に近い「言志」の歌が成立しかけたものの、総体としては「文芸」ではあっても「文学」ではない、と結論づけられることになる。[29]

Hosei University Repository

さらに風巻は取り出したこの「文学」の系譜を、「文学」を生み出そうとする意識によって書かれたか否かという基準によって区分する。彼によれば「全面的に芸術品生産の意識によつて作られた作品」を認めうるのは『新古今集』の段階においてであり、「それ以前のものは、平安抒情の系譜に属しながら文学以前である」、つまり「作品を中にして、私らは私らの心の中に文学を成立せしめうるけれども、その作品生産にいたるはたらきは文学以前の意識によつて支配されてゐる」[30]のだとするのである。ここではヴァレリーの構図を利用しつつ、読者から見た「文学」と作者から見た「文学」のズレが導き出されている。

したがって『古今集』以後『新古今集』に至るまでの文学は、享受者の側からすれば「文学」であっても、生産者の側の意識を問題にすれば「文学」ではないという、曖昧な領域に置かれることになる。三〇年代の風巻は上代と中世との線引きに試行錯誤しているが、その原因をこうした平安文学の二重性に見ることもできるだろう[31]。そして実際『神々』『構想』の両著に収められた具体的な文学史論も、そのほとんどが上代から中世への連続性ないし断絶という問題にかかわるものとなっているのである。

四　「文学」から「伝統」へ

風巻によって『古今集』から『新古今集』へとつながるラインとして構想された文学伝統は、当時の記紀万葉を絶対視する一般的な古典観とは相容れないものであった[32]。風巻の『万葉集』に対する留保の姿勢は、「主体的立場」の立言に至るより前、三〇年代において中世歌人の万葉歌に対する態度を検討するなかで得られたと考えられる。「中世文学と万葉集」（一九三三年初出）のなかで風巻は、藤原俊成・定家が『万葉集』を尊重しつつも安易な模倣を戒めた背後には、上代と当時（中世）との時代的懸隔への鋭い意識があり、また『古今集』に依拠する彼らの立場の主張があったことを跡づけて見せている[33]。つまり、単に時代的に古いがゆえに記紀万葉を尊重するのではなく、選択的な古典観を採るという態度を風巻は俊成・定家らに見出したのである。

Hosei University Repository

中世歌人の『万葉集』受容のあり方は、三〇年代の風巻にとってまずは古典理解という行為が個人的・時代的限界をもつという認識をもたらしたが、次第に力点は古典、さらに伝統というものの把握における現在中心的な視点の優位性におかれるようになる。『文芸文化』一九四一年二月号に発表された「国文学の再建」で風巻は「今日の眼によつて現代人に主体的に把握され生かされてゐる限りの古典」が「伝統」であるとし、それは「虚空をゆく電波のごとく磁力線のごとく」普段は目に見えないが、「感じあふものに到達した時に、燦として顕はれる」存在だと述べている。[34]

こうした考えは『新潮』一九四一年七月号の「日本文芸学（座談会）」での発言に一層明確である。この席で風巻は、東大国文科での恩師にあたる久松潜一が国文学を「日本の主体的なもの」として「国体に即して、普遍なものにたかめて行く」必要性を述べたのに対して、その普遍的なものは過去のものの「寄せ算、引き算」から生まれるのか、と問う。「昔から今まで伝統があるのぢやなくて、僕らが伝統をつくるのぢやないでせうか。〔……〕昔の人の残したものの中に伝統があるのぢやなくて、吾々の方が昔の人のつくつたものを見た時に、吾々に繋がりがあると感じとつたものだけが伝統なのぢやないでせうか」と言う風巻に、久松は根底には連続性が存在している、と答える。この返事に風巻は詰問口調でつぎのようにまくし立てる。

風巻　つまり超越的に実在するのであつて、吾々はそれをただ受取ればいいわけなのですね。
久松　受取るとも言へますね。
風巻　受取ればいいといふことになるわけですね。

この問答につづく箇所で風巻は、われわれが自らが生々発展する存在だという自覚を持つことが重要だと主張する。「それは確かにさうですが」と受け流す久松を前にして風巻は「さうして過去にばかりたよつてゐてはならないと思ふ。吾々日本人が生きてゐるといふことは、明日をつくらなければならぬことであつて、過去から学ぶもの

Hosei University Repository

はないと思ふのです」とまで断言しているのである。[35]

五　成長する主体から「個」へ

上記の座談会に見られる風巻の論点は、伝統が現代において構築されるものだということと、認識主体の側が変化・成長するということにあった。このうち前者について言えば、風巻は「主体的」な伝統把握が、恣意的な、過去に対する現在の安易な投影と同一視されることを警戒してもいる。たとえば「国文学史」(『国語と国文学』一九四二年七月号)では、古典が存続するにあたっての「形式の約束」の重要性を指摘し、「今日の感じ方だけで文学作品の決着はできない。それは何よりも先づ歴史的な智識によつて照らされてゐなくてはならぬ」[36]と述べており、また同年十一月の「私的と国民的」(『読書人』国文学書評欄)では、小林秀雄の名を挙げて、歴史に「今日の人間の問題の比喩的表現」を見る立場が感性や感情の不変を前提としていることを批判している。[37]

二つ目の主体の側の生々発展というポイントについては、『構想』第三篇に収録された日米開戦後まもなくに書かれた文章を見ると、戦争による国家と国民の発展という文脈と絡めて主張がなされている。[38]しかしとくに『構想』出版以後の文章を見ると、そうした質的な変化が研究主体の自由ないし自立性を確保する口実となっているようにも感じられる。「古典研究の志向」(『短歌研究』一九四三年七月号)では、現在その歴史的位置に応じて「如何に日本国民の感性と知性が生長発展してゆきつつある」かを痛感すれば当然「主体的見方」に至るはずだ、という論法が採られている。[39]また「今日と古典」(『日本短歌』同年八月号)では、現在の日本人にとっての「神典」かつ「至上命令の書」である記紀万葉とは別に、「個人としての自我の自覚」を育んだ三代集以降の系譜があることを改めて強調し、次のように結んでいる。

平安以降の文芸も、吾々または次の時代の若い人にとつて、もつと鋭く正しく読まれる時がくるであらう。また

Hosei University Repository

その必要があるのである。吾々が個としてもつと立派になり深くなるにつれて、個の人間の心の生長に伴つたなげきやため息や怒りやたのしみやささやきやは、もつと深く鋭く温かく読みとられるやうになるであらう。[40]

ここで風巻は「生長」という語を用いながら、個人が個人として十全に発達しうる社会の到来――つまり戦争後の時代を見通すとともに、その担い手たるべき若い世代の果たす役割に期待をかけるのである。

しかしたとえば岩崎萬喜夫による書評は、若い世代の国文学研究者たちの風巻に対する強い期待と同時に、その所論を前にしたとまどいを伝えている。[41]『発生』刊行時の『文芸文化』グループの反応にもある種の距離を見て取ることができるが、[42]より明確な反応として、いわゆる歴史社会学派のメンバーとして三〇年代半ばの風巻と親しかった永積安明の『構想』評（『文学』一九四三年六月号）を挙げてみよう。永積はこの書物が国文学史の書き換えを切望する「若い学徒たち」の「注目をあびて立ち現はれた」としつつ、「はつきりしないわかりにくいものがある」という率直な読後感を告白する。その分かりにくさは、永積の説明によれば、風巻が「合理的科学的」立場――つまりマルクス主義的立場――を批判・放棄しながら、結果的にその時代区分論における上代と中世の境界、つまり『古今集』の時代に「人間の自覚の時期」を置いていることから生じているのだという。そして永積自身は「若い世代」に、「科学的方法」をそこに読みとることでこの風巻の仕事を「まちがひなく正当に摂取」するよう助言するのである。[43]

また井本農一のような、マルクス主義からも国粋主義からも距離を置いたところで国文学史方法論をめぐる考察を続けていた研究者の議論にも、風巻への間接的批判を見出すことができる。「主観的偏向に対する一つの反省」という副題がつけられた井本の論文「文学史の一課題」（『国語と国文学』一九四二年十月号）では、「文学史は必ず何等か主観的であり、又あるべきである」としながらも、文学史においては「一貫せる文学の本質」が存在することが前提だとし、[44]主観的判断は出発点ではなく、あくまで客観的方法ないし論理の終点にあるべきだとしているのである。

Hosei University Repository

客観的・科学的方法論の厳守を主張する者、あるいは永久不変の本質に信をおく者、立場の違いはあっても若い研究者たちは、戦時下にあってある普遍的なものの存在に希望をつなごうとしていたのであり、注目されつつも風巻の立場は孤独であったと言えるだろう。

六　読者論の見地から

四〇年代前半の三冊の著作とその周辺の文章・発言のなかで、風巻は主体的立場からの文学（史）方法論を情熱を込めて繰り返し主張していた。しかし時代と切り結ぼうとする意図にもかかわらず、風巻の主張の内容が必ずしも周囲の理解を得られていなかったのも事実である。そもそも風巻による方法論は、中世研究から帰納された結果として析出したものであると言えるのではないだろうか。

風巻は二〇年代後半から三〇年代半ばにかけて、のちに『新古今時代』に集約される実証的な研究を積み重ねる一方で、対象となる中世和歌・歌人に対するアンビヴァレントな感情を整理できずにいた。しかしいわゆる歴史社会学派とのかかわりのなかで、『新古今集』とその歌人たちへの共感を明確に自覚し、その時代を足場とした文学史的見取り図の着想を得る。それが結実したのが一九三九年に執筆され、四〇年に発表された『中世の文学伝統』である。[45] この著作で『新古今集』を中心とした、自らが共感しうるものとしての文学伝統を摑み得たという事実がまず存在し、あとでそれに対する理論が立ち上げられたと考えるべきであろう。

そのことを踏まえたうえでこの「主体的立場」の文学史論を見直すとき、その先駆性が「読者」の立場を中心に据えた点にあるということを確認しておきたい。風巻自身三〇年代の自分が（主観的な）「詩人」と（客観的な）「歴史家」のあいだで研究者としての自らの立場を定めかねた様子を告白していたが、これは高田里恵子にならって言うなら、大正期以降の文学部特有の、「教授＝研究者」が「詩人＝創作家」に対比され、前者が後者に劣等感を抱くという図式に沿うものである。[46] 風巻はここに「（主観的／主体的な）読者＝研究者」という立場を導入し、

Hosei University Repository

その視点からの文学史を構想することでコンプレックスに解決を与え、同時に読者を受動的な立場から、能動的な立場へと引き上げたのである。

この読者に力点を置いた見方は、現在の観点からすればハンス・ローベルト・ヤウスの有名な「期待の地平」にもとづいた文学史理論・受容理論をただちに想起させるものである。[47] 時代背景を異にしながら、ヤウスの場合も風巻の場合も、マルクス主義と別のイズムとの――風巻の場合は一九三〇年代の日本における歴史社会学派と日本文芸学との、ヤウスの場合は戦後西ドイツにおけるマルクス主義とフォルマリズムとの――対立という状況を背景としていることも注意される。[48] しかし風巻の場合、せっかく読者の立場に着目しながら、それが風巻自身の、あるいは現代の日本人・日本国民としての立場ないし感性の主張にとどまってしまった憾みがある。ヤウスによるならば、読者によるテクストの「受容」には、読者の側における過去のテクストの「記憶」が必要になる。[49] 「読者」と「作者」を一身に兼ねた新古今歌人のあり方、そしてその技法としての本歌取り・本説取りは、この問題の考察にあたって特権的な題材となるはずである。しかし風巻は――すでに見たとおり、新古今歌人による万葉歌の選別的な摂取のあり方を文学の主体的享受のモデルケースとしていたにもかかわらず――技法としての「本歌取」ないし「引喩」を、あくまで「古典憧憬」のあらわれとしてとらえるのであり、たとえば読者の立場から作者の立場への転回による積極的な創作行為としてとらえるには至っていない。[50]

それは風巻個人の限界というよりも、国文学全体の問題であったというべきかもしれない。当時、風巻の友人であった国文学者・森本次吉は国文学研究における「表現」への注目の欠如を批判的に論じている。[51] たしかに同時代の欧米における、いわゆる「新批評」をはじめとするフォルマリズム的な読み、あるいはフランスのエクスプリカシオン・ドゥ・テクストの伝統といったものが存在していれば、本歌取りという問題についても、単なる源泉探しを超えて、細部の表現の差異を見極め、新たな文脈での意味連関をたどった上で、創造行為としての豊かな意義付けをすることが可能になったのではないだろうか。[52] ヤウスの受容理論の場合もフォルマリズム的な文学研究を前提としたものであったことは、すでに述べたとおりである。

Hosei University Repository

おわりに

一九九〇年代後半以降、制度としての「国語国文学」が大きな転換期を迎えるなかで、研究史におけるリヴィジョニズムが明確になってきた。そのなかで、学界の戦前と戦後を連続性のなかでとらえる視点に立って、従来穏健ないしは進歩的と見なされてきた研究者について、その戦時下の言動だけでなく、戦後における無反省あるいは沈黙を含めてその（戦争）責任を追及する研究が相次いで発表されている。風巻景次郎もその批判的検討の対象となっている一人である。[53]

風巻の場合、「古典研究の歴史」[54]（一九五九年）に代表されるその研究史的業績が、今日なお明治から敗戦に至る国文学の歴史に関して支配的な準拠枠であり続けている点から考えるなら、一層その「責任」は重いと言えるかもしれない。ただそれだけに、その「批判」にあたっては単なる切捨てに終るのではなく、風巻が何を語ろうとしていたのかを時代の用語法と彼の韜晦のなかから読み取り、その上で、風巻が（語るべき）何を語らなかったのかを見極めるという作業が必要になるだろう。そうしたかたちでの風巻との対決が、近代国文学研究という「物語」の書き換えにあたって不可避であると思われる。

※ 本文・注ともに、引用文における仮名遣いは原文のまま、漢字については新字体に改めた。
※ 出典のうち『全集』とあるのは、『風巻景次郎全集』（全十巻）（桜楓社、一九六九―七一年）の略である。

《注》

（1） 西郷信綱「方法の問題――文学史の非完結性について――（解説）」『全集』第一巻、六八五頁。
（2） 風巻自身読者がこの三冊を併読し「私の庶幾するところを想ひ描」いてほしいと述べている（「序」『構想』序六頁）。
（3） なお以下で述べるほかに、三冊いずれにも書物としての構成・成立事情を説明した「序」が付されている。

Hosei University Repository

(4) そのほかに石山徹郎による風巻の論文に対する批評が一本収録されている。
(5) 『構想』四七頁。
(6) たとえば「新興国文学」(『コトバ』一九三四年一月号)では、「文学の文学たり得る尺度は作品自体に存せずして、これを受容する人にある」と述べている(『発生』二四九頁)。
(7) 「日本文芸学の発生」『発生』二一八頁。
(8) 『発生』一四頁。
(9) 『発生』二六—二七頁。
(10) 『構想』二三頁。のち同論文が『日本文学史の周辺』(塙書房、一九五三年)に再録されたおり、「超個人的な」の前に「ある社会の集団なり階級なり、言はば」というフレーズが補入されている(同書三〇一頁)。この点について『全集』の校異では指摘されていない。
(11) 『発生』二六頁。
(12) なお「主観的」と「主体的」の区別について風巻は、後者は前者に比べて「もつと身を以て感じてゐる事柄なのだといふ点」を強調した言い方だという説明もおこなっている(「文学史」『神々』三〇頁)。
(13) この語をキーワードにしていたのがいわゆる「京都学派」の哲学者たちである(「世界史的立場と日本(座談会)」『中央公論』一九四二年一月号、などを参照)。その一人高山岩男は「歴史で主役を演ずる人間、即ち歴史的主体は、簡単に民族ともいえるし国民ともいえましょう」と述べている(高山『京都哲学の回想』燈影舎、一九九五年、一五五頁)。
(14) 「国文学徒にうつたふ」(『国語と国文学』一九三九年八月号、一—九頁)で志田は、国文学者が「日本を主体とする日本世界史を立て、日本的世界建設への道を明かならしむる戦士」たることを要求し、「日本の主体的普遍に立つ学問の先頭に、輝かしい復本の学たりし国学の伝統を保有する国文学が、今日の体系を樹立して立たなければならない」とする。
(15) 加藤将之は風巻が「聡明にも」「主体性を主体的体験という語に置きかえ」たと指摘する(「主体性の国文学者 風巻景次郎とその歌論」『短歌研究』一九七二年十一月号、三〇頁)。
(16) 時枝誠記「言語に対する二の立場——主体的立場と観察者的立場——」『言語本質論』(岩波書店、一九七三年)所収、三五五—三六四頁。なお安田敏朗によれば「主体的立場」を時枝が導入したのは一九三九年十月二十日から四〇年六月一日までの時期である(安田『近代日本言語史再考——帝国化する「日本語」と「言語問題」』三元社、二〇〇〇年、三四七頁)。
(17) 風巻「改版の序」『文学の発生(日本文学史ノートI)』(角川書店、一九四八年)五頁、を参照。
(18) 『発生』の「序」で風巻は、文学史の見方に関してようやく「きはどい所まで擢ぎつけて」いた自分が「文学の発生」

Hosei University Repository

を執筆しえたきっかけは、ヴァレリーが一九三七年末からソルボンヌでおこなった講義「詩学序説」だったと述べている（序五頁）。なお風巻が参照したテクストはポール・ヴァレリー（河盛好蔵訳）『詩学叙説』（小山書店、一九三九年）であると考えられる。なお翻訳の表題には「叙説」とあるが、風巻は原題が *Introduction à la poétique* であるためか「序説」と表記している。

(19) ヴァレリー『詩学叙説』四頁。
(20) ヴァレリー『詩学叙説』三二頁。
(21) 『発生』二四頁
(22) 風巻『中世の文学伝統』（日本放送出版協会、一九四〇年）二五頁。
(23) 『発生』序四頁。
(24) 『構想』五三頁。
(25) 「民俗座談　柳田國男氏を囲みて」（『日本評論』一九四〇年七月号）二〇八頁。この座談会には他に谷川徹三、秋田雨雀、橋浦泰雄が出席している。
(26) 「俳諧と日本文学（座談会）」（『俳句研究』一九四〇年十二月号）一六二頁。
(27) 「文学の発生」（『発生』所収）、「古代詩と中世詩との間」（『神々』所収）などを参照。
(28) 『発生』二〇頁以下等を参照。
(29) 「古代詩と中世詩との間」（『神々』所収）、「中世文芸の始発」（『構想』所収）を参照。
(30) 『発生』二九―三〇頁。
(31) 『構想』所収の二論文「上代国文学　その範囲」（初出一九三五年九月）「中世文学の史的限界」（同一九三六年九月）を参照。前者では鎌倉末までを上代とするが、後者では平安初期以降を中世としている。
(32) 当時の『万葉集』賛美の言説は枚挙に暇がないが、たとえば浅野晃は「国民文学への道」と題する文章（『新潮』一九四一年十一月号）で、目下の「国民の再形成のために必要な国民的＝臣民的感覚の回復のための戦ひ」において依拠すべき古典として、記紀とともに『万葉集』を挙げている（三一頁）。
(33) 『万葉集講座』第四巻（春陽堂、一九三三年）に収録。同論文は改稿され「定家為家の撰集と万葉集」として風巻『新古今時代』（人文書院、一九三六年）に再録。
(34) 風巻「国文学の再建」（『文芸文化』一九四一年二月号）七頁。同論文は改稿され『神々』「序」の一部に転用されている。
(35) 「日本文芸学（座談会）」（『新潮』一九四一年七月号）一二三―一二五頁。さすがにこれに対しては久松が即座に「今と

Hosei University Repository

いふものは過去を離れてはないと思ふ」と調子を改めて反論し、気おされた風巻は「ちよつと今のは言ひすぎました。取消すことにします」と取り繕っている。なお風巻、久松以外に司会として雅川滉（成瀬正勝）が出席している。

(36) 風巻「国文学史」（『国語と国文学』一九四二年七月号）六頁。

(37) 風巻「私的と国民的」（『読書人』一九四二年十一月号）四九―五〇頁。東京堂刊行の出版情報誌である同誌は日本主義イデオローグの拠り所だったともされる（平野謙『昭和文学史』、筑摩書房、一九六三年、二四五頁）が、風巻は四二年十月から十二月の三回「国文学」書評欄を担当している。なお小林秀雄『歴史と文学』が創元社から刊行されたのは一九四一年九月である。

(38) たとえば「中今と伝統」には「昭和十六年十二月八日は日本人の主体的歴史感覚を更新せしめた」といった表現が見られる（『構想』三六八頁）。

(39) 「古典研究の志向」（『短歌研究』一九四三年七月号）二二頁。

(40) 「今日と古典」（『日本短歌』一九四三年八月号）五頁。

(41) 岩崎嵩喜夫「風巻景次郎氏著　文学の発生」『古事記伝の研究（皇国文学第二輯）』（聖文閣、一九四一年）所収、同「神々と人間――風巻景次郎氏について――」（『読書人』一九四二年十二月号）を参照。

(42) 『発生』は「文芸文化叢書」の九冊目として雑誌『文芸文化』の発行元・子文書房から刊行されたが、同叢書の他の巻には同人らの複数の評があるのに対し、『発生』については風巻の元同僚でいわゆる歴史社会学派の一人である石山徹郎の書評を掲載したのみである。

(43) 永積安明「日本文学史の構想　風巻景次郎著（新刊紹介）」（『国語と国文学』一九四三年六月号）七八―八〇頁。

(44) 井本農一「文学史の一課題――主観的偏向に対する一つの反省――」（『国語と国文学』一九四二年十月号）三二―四三頁。

(45) この経緯については拙論「一九三〇年代の国文学研究（二）――風巻景次郎の位置について――」（『言語と文化』第三号、二〇〇六年一月）を参照。

(46) 高田里恵子『文学部をめぐる病い――教養主義・ナチス・旧制高校』（松籟社、二〇〇一年）六四頁。

(47) 笹沼俊暁『「国文学」の思想――その繁栄と終焉――』（学術出版会、二〇〇六年）二五七頁。

(48) H・R・ヤウス（轡田収訳）『挑発としての文学史』（岩波書店、一九七六年）、とくにその第一章「挑発としての文学史」を参照。

(49) ヤウス『挑発としての文学史』三四頁を参照。

(50) 風巻「『新古今集』の特質と時代的傾向」（『新古今時代』所収）などを参照。なお当時本歌取りを積極的にとらえた数

Hosei University Repository

少ない例として、『文芸文化』グループの池田勉は、一九四〇年九月『コトバ』誌上でのシンポジウムの提議論文「国文学は如何に進むべきか」で本歌取りを「詩人にとって最も意識的な文化行為」だとしている（同誌七三頁）。

(51) 森本次吉「表現」（『国語と国文学』一九四一年七月号）一―一七頁。

(52) こうした（少なくとも理念として）テクスト自体へと向かう読みが欧米において大きな役割を持ったことは、アメリカにおける大学の大衆化、フランスにおけるバカロレアの存在といった、中等・高等教育の制度的な問題と密接な関係がある。少なくとも戦前期の日本においては、文学教育はほぼ初等教育に限定されて意味を持ちえた問題であった。

(53) 風巻を対象としたものとして、村井紀「国文学者の十五年戦争（一）」（『批評空間』Ⅱ―一六、一九九八年一月）、同「国文学者の十五年戦争（二）」（『批評空間』Ⅱ―一八、一九九八年七月）、前掲の笹沼『「国文学」の思想』の第六章「「国文学」の「革新」」などがある。

(54) 風巻「古典研究の歴史」『岩波講座日本文学史』第一六巻（岩波書店、一九五九年）所収。

付記　本論文は二〇〇六年度法政大学国内研修員としての研究成果の一部である。

（比較文学・法学部教授）